

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00368

研究課題名（和文）謝靈運の詩文における「景」「情」相関と仏教・道教思想

研究課題名（英文）Study of the Interaction of "Scenery" and "Emotion" in Xie Ling-yun's Poetry and its Relation to Buddhist and Taoist Thought

研究代表者

堂蘭 淑子 (DOZONO, Yoshiko)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80514330

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主に慧遠集團の山水詠と謝靈運詩との関係性を考察したものである。廬山諸道人「遊石門詩」序と謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」詩は、山水の中で感覚された超越者の応現を描き、その後省察を経て真の悟りに向かうという叙述の流れが完全に一致している。また慧遠「遊廬山詩」と謝靈運「於南山往北山經湖中瞻眺」詩は、独り山水を遊行することによってこそ「理」に通じることができるという認識を共有しており、慧遠にとっての「感応」が謝靈運にとっての「賞」であったことが分かる。山水詠を解脱への契機とする廬山集團の姿勢が謝靈運の作詩に影響を与えて、景と心の相互作用を表現する山水詩を生み出した可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

謝靈運による山水詩の確立は、中国叙景詩の歴史において一つの画期をなしている。しかしその詩がいかなる思想的背景のもとで形成されたのか、その独自の表現や詩境はいかに解すべきなのかについては、今なお十全に解明されてはいない。本研究は、当時の仏教界の重鎮であった廬山慧遠とその周囲の人々の山水詠を謝靈運詩と比較考察することによって、山水詩成立過程の一端を解明し、また研究者によって解釈が分かれている謝靈運のいくつかの詩について、新たな見解を提示したものである。

研究成果の概要（英文）：This study mainly examines the relationship between the Huiyuan group's landscape poetry and Xie Lingyun's poetry.

The preface to "You Shi-men shi" by monks of Mount Lu and the poem "Cong Jinzhu-jian yue ling xi xing" by Xie Lingyun unfold in exactly the same way, describing the responsive manifestation of transcendent entity sensed in nature, followed by reflection, leading to true enlightenment. In addition, both Hui-yuan's "You Lu-shan shi" and Xie Ling-yun's "Yu Nan-shan wang Bei-shan jing hu-zhong zhan-tiao" share a perception that it is by wandering alone that it becomes possible to realize principle, indicating that Hui-yuan's "gan-ying" corresponded to Xie Lingyun's "shang".

The stance of Hui-yuan's group, which regarded writing works about the mountain scenery as an act that could lead to liberation, may have had an influence on Xie Ling-yun's poetry writing and gave rise to his landscape poems that described interactions between the scenery and the mind.

研究分野：中国古典文学

キーワード：謝靈運 山水詩 賞 廬山慧遠 感応

1. 研究開始当初の背景

風景描写が早期に発達したことは中国古典詩の大きな特徴の一つであり、魏晉南北朝時代の後期には、独立した価値を持つものとしての風景を描きつつ、詩人の情感の反映を一体的に表現する、いわゆる「景情一致」の詩が現れる。この叙景詩の発達に重要な役割を果たしたのが、東晉～劉宋期の謝靈運(385-433)である。当時山水が独立した表現対象となった背景には、世界の根源的原理としての「道」が山水の中に顕現しているという老荘に基づく思想があり、東晉期には王羲之らによる「蘭亭詩」のような、景物描写を交えながら「道」と同化した精神を詠う「玄言詩」が数多く制作された(葛暁音『山水田園詩派研究』1993年)。謝靈運もその流れを継承するが、玄言詩とは異なり、眼前の景物と自己の心との相互作用を描いているという特徴がある(興膳宏『文心雕龍』の自然観照』1981年)。謝靈運によるこの山水描写の「質的転換」には、仏教思想の影響が早くから指摘されてきた(志村良治「山水詩への契機」1973年など)。中でも本研究と関わるのが、李澤厚・劉綱紀主編『中国美学史』(1987年)の見解である。この書は、当時仏教界の重鎮であった廬山慧遠(334-416)が「仏影銘并序」の中で示した「法身」思想、すなわち万物は究極の仏である「法身」の神明の体現であるとするその思想が、謝靈運の山水詩に大きな影響を与えたと指摘する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、謝靈運の詩文における「景」と「情」との相関関係を、当時の仏教思想および道教思想の表現と照らし合わせながら考察することにより、自らの心と響き合いながら現出する「風景」が表現されるにいたる文学的・思想的過程を明らかにすることである。

現実のある特定の場が特別な価値を有するものとして詠まれる例には、宴や行楽の詩があるが、個として景物と相対する姿勢を描くものは、宗教体験を詠じる詩に特徴的である。謝靈運の山水詩が強い宗教性を有し、とりわけ莊園のあった始寧に隠棲して以降の作品には仏教思想の影響が顕著に見られることはすでに度々指摘されているが(矢淵孝良「謝靈運山水詩の背景 始寧時代の作品を中心にして」1984年など)、謝詩における「景」と「情」との相関を仏教集團の山水詠と細かく比較対照する研究はまだ行われていない。本研究は、仏教・道教思想を背景とする詩文の相互の関係性を表現のレベルで詳しく分析し、そのうえで解釈の定まらない謝靈運のいくつかの詩について、これまでとは異なる視点から再解釈することを目指した。

3. 研究の方法

本研究の方法は、魏晉南北朝期の仏教・道教関連著作の表現を文学的見地も交えて分析し、その共時的関係性に基づいて謝靈運山水詩を再検討するというものである。この時期の仏教・道教文献に関する基礎研究はかなり進展しているが、個々の表現に着目した研究は少ない。文学か思想かに関わらず、同時期広く用いられた表現に着目してそこに共通する時代精神を読み取り、個々の作品の読みに反映させることは非常に有効な研究手法である。

具体的には、廬山慧遠が法身仏との「感応」を重視し、中国伝統の「感応」(はたらきかけることと呼ぶこと)思想によって「見仏」を説明したことに注目し、慧遠集團の「感応」に関する表現と謝靈運詩とを比較分析した。山水詠を宗教的営為と位置づけた慧遠の「遊廬山詩(廬山を遊行する詩)」と、その信徒たちの奉和詩、ならびに慧遠の弟子の作と推測される「遊石門詩并序(石門を遊行する詩ならびに序)」について、詳細な表現分析に基づき新たな解釈を提示し、彼らが山中の「感応」体験をどのように描いているかを具体的に解き明かすことを通じて、謝靈運山水詩との関係性を明確にすることを目指した。また「景」「情」相関の表現と深くかかわると考えられる、謝靈運詩文の「賞心」「心賞」「賞」の意味合いについて、先行研究の見解を整理しながらすべての用例を再検討した。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の三点である。

(1) 慧遠集團の「感応」表現と謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」詩との関連性の解明

まず慧遠の感応思想について先行研究(福永光司「慧遠と老荘思想」1962年など)に基づきつつ整理を行い、衆生の「感」(はたらきかけ)に法身仏が「応」じるといふ仏教の影響を受けた「感応」思想を、慧遠が「見仏」の根拠としたこと、彼の「仏影銘」にはその感応思想が明確に表れていることを確認した。そのうえで慧遠「遊廬山詩」は、見仏に類する感応体験を「叩」「感」の語によって表し、一修行者としての自己が独り山中を遊行することで「感応」を体験し悟りに至るさまを描くものであることを示した。ただし「遊廬山詩」は象徴性の高い表現をとっており、感応のありさまを具体的に描いているとは言いがたい。一方、慧遠と同じ思想基盤に立つ者の手になると考えられる廬山諸道人「遊石門詩」の序は、遊行の時・目的・同行者・行程・天候を具体的に叙述し、その一回の遊行において超越者の応現をどのように知覚認識したか、その感応体験によって自身の心境がどのように変化し、その後いかなる考察を経てどのような悟りに至ったのかを順を追って細かく記している。特に感応体験を記す場面では、最初の契機と、

前触れを感覚したこと、応現を認識したことをそれぞれ区別して描いており、その場の景物とそこにいる者の心とが相互に反応しあう中で立ち現れた境界を意識的に表現していることを指摘した。

謝靈運の「從斤竹澗越嶺溪行(斤竹澗から山を越えて谷川沿いに行く)」詩については、第15句の「山阿人」が詩人とは異次元の超越者を指すと考えられること、第13・14句の「挹飛泉(滝の水をくむ)」や「擿葉卷(巻き上がった葉を摘み取る)」は、その超越者の現れを誘発する行為として意味づけられていることを論じた。その解釈に立つて先の「遊石門詩」序の一段とこの謝詩を対照させてみると、特に「動作中に捉えた景物」「前触れ」「超越者の応現」「その後の心境」「応現の作用に対する考察」「言葉で説明する難しさ」「真の悟りへ」という流れは完全に共通することが確かめられた。

廬山諸道人「遊石門詩」の序は、山水のはざままで感覚された彷彿たる応現とその時々的心境とを個別具体的に描き、その文学的営みを解脱への契機としている。このような廬山集団の姿勢が謝靈運の作詩、特に仏教と深く関わった始寧隱棲時代の作詩に影響を与えて、折々における景物との出会いと心境を表現する「山水詩」を生み出した可能性がある。感応思想に基づく慧遠集団の山水詠が景物のみならず、その時々的心境のありようと知覚認識作用に関する深い考察を表現していることは、山水詩成立の過程において重要な意味を持ったと考えられる。(2023年発表論文“Nature and Enlightenment”および「廬山慧遠集団と謝靈運の山水詠における「感応」表現」より)

(2) 慧遠「遊廬山詩」と謝靈運「於南山往北山經湖中瞻眺」「田南樹園激流植援」詩に通底する精神性の解明

まず、「独りの遊行」であることを明示する慧遠と謝靈運の詩を比較分析することによって、彼らにとって独り山水に遊ぶ姿を描くことにはどのような意味があったのかを考察した。慧遠「遊廬山詩」と謝靈運「於南山往北山經湖中瞻眺(南山から北山へ行こうとして巫湖の中を通り過ぎ慕わしく眺める)」詩には、独り山水を遊行することによってこそ根源的な真理に通じることができる、という共通認識が認められる。慧遠詩では「独冥游(たった独りで虚心に遊行する)」「感応」「理」との一体化という悟りへの道筋が描かれ、謝詩では「孤遊(独りでの遊行)」「賞(交感すること)」「理」との一体化という流れが提示される。この類似は両者の詩が同じ思想基盤に立つものであること、慧遠にとっての「感応」が謝靈運にとっての「賞」であることを示している。「孤遊」や「独遊」という表現は、玄言詩が隆盛した東晋期に複数の用例があり、いずれも隠士・高士の遊行を指すことが多い。ただし「孤遊」の例では、周囲と自在に関わりながらも個としての主体性を保って遊行する様子が示されるのに対し、「独遊」を用いた例では、どのような状況でも本性を貫くその不変性を強調する傾向があり、慧遠が「独冥游」を用い謝靈運が「孤遊」を用いたのは、両者の詩境の違いも示している。

謝靈運の「登臨海嶠初發彊中作與從弟惠連見羊何共和之(臨海嶠に登ろうとして彊中を出発したばかりの作 從弟の惠連に与え、羊璿之・何長瑜に示して共にこの作に唱和させる)」と「酬從弟惠連(從弟の惠連に答える)」という詩は、謝惠連らとの永遠の別れを覚悟して深山に独り入ると自己の求道的なあり方を表現している。また「田南樹園激流植援(耕作地の南に庭園を造り小川を引き入れて間垣を植える)」詩の「妙善冀能同(至善の境界がどうか同じくなりますように)」という末句は、今は離ればなれでもいつかは友と至善の境界を等しくしたいという願望を表しており、個々人が独りで宗教的实践に取り組んだ結果「妙」「妙善」が一致するという思想を背景に持つ点において、慧遠の「妙同趣自均(至高の境地が同じであればその向かうところは自然と揃う)」句や王喬之の「妙善自玄同(至善の境地は自然と奥深く一致する)」句との関連が明確に認められる。

謝詩における「孤遊」は、中間の存在を意識しながらも求道のためにあえて独りになるという意味合いを含む。謝靈運は、独り山水を遊行することで「理」に通じようとする自らを描いた。そして「理」に通じ「妙善」に達することで、ある時は時間を隔てた「古人」と、ある時は空間を隔てた同志と深くつながろうとする意志を詠った。単に「山水」を描くのではなく、個々の景物と自己との関わりをその場限りの唯一絶対の境界として構築する精神、そしてその唯一の境界を、遙かに時空を隔てた他者と共有しようとする心性が「山水詩」を生み出したのであり、そしてその精神性は、唐代の山水詩である柳宗元「南澗中題(南の谷川で作詩する)」にも受け継がれていることが分かった。慧遠「遊廬山詩」から謝靈運山水詩を経て柳宗元に至る「独遊」の系譜が、ここに認められるのである。(2023年発表論文「独り遊ぶ山水」より)

(3) 謝靈運詩における「賞心」「心賞」「賞」の意味合いについて

謝靈運詩文における「賞心」「心賞」「賞」の用例を検討すると、「賞心」の例では、現在に至るまで様々なものと交わり関わってきた我が心、あるいは将来新たな交わりを結んで変わってゆくであろう我が心、という意味合いを含み、いずれも自身の心の変遷を強く意識した形で使われている。一方「心賞」は、「石室山」詩においては、心が何ものかとやりとりするなかで形作られてきたもの、という意味合いを含み、さらに「賞」のありようを二重重ねて描くことで、わが「心」が他者との「賞」によって次々と変化し新たになっていくさまを表現している。これは「從斤竹澗越嶺溪行」詩にいう「情用賞為美(情は〔超越者と〕交感することで美しくなる)」

の具体像を描き出したものと言える。また「心」を伴わず単独で使われる「賞」は、今眼前で起こっている交感を詠うものと、哲理を述べる部分で用いられるものがある。今現在の交感を描く二例では、「賞するものがない」という否定の形によって、今自分が感得しているものは自分以外の人間には感得不可能である、との自覚が表されている。これらは超越的存在、靈的存在との交感を描くのに使われており、当時の仏教において重視された「感応」と類似する感覚を表すと考えられる。(2022年口頭発表「独遊する山水」より)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 堂園 淑子	4. 巻 97
2. 論文標題 独り遊ぶ山水 慧遠「遊廬山詩」と謝靈運山水詩をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都大学中国語学中国文学研究室『中国文学報』	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堂園 淑子	4. 巻 9
2. 論文標題 廬山慧遠集団と謝靈運の山水詠における「感応」表現	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 桃の会『桃の会論集』	6. 最初と最後の頁 51-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 DOZONO Yoshiko	4. 巻 125
2. 論文標題 Nature and Enlightenment: Expressions of "Resonantal Stimulus and Response" in the Poems "An Outing on Mount Lu" and "An Outing to Stone Gate" by Hui-Yuan and Others and Hsieh Ling-Yun's Poem "From Chin-chu Gully I Cross a Ridge and Go along a Stream"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 53 - 68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 堂園 淑子
2. 発表標題 独遊する山水 廬山慧遠と謝靈運の詩をめぐって
3. 学会等名 京都大学中国文学会第三十七回例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堂園 淑子
2. 発表標題 山水と「一悟」のあいだ 慧遠らによる「遊廬山」「遊石門」詩と謝靈運の山水詩
3. 学会等名 東方学会、国際東方学者会議（東京会議）シンポジウム「哲理と自然 六朝山水詩の成立」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堂園 淑子
2. 発表標題 廬山慧遠集団と謝靈運の山水詠における「感応」表現
3. 学会等名 桃の会例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

DOZONO Yoshiko, "Nature and Enlightenment: The Poems 'An Outing to Mount Lu' and 'An Outing to Stone Gate' by Hui-yuan and Others and Hsieh Ling-yun's Landscape Poetry"

(東方学会『国際東方学者会議紀要』66冊、2022年、66-67頁)

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------